
ある恋の物語

智美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある恋の物語

【著者名】

NZマーク

N1329D

【作者名】

智美

【あらすじ】

かつといづかは出逢つ……生まれる前から決まっていた運命の人には

⋮

第1話

ソフィア王国がおもむる国。

自然豊かな美しい国である。

争い事が全く無い…わけではないが、国民は穏やかに暮らしていた。
その隣の国。

トレゾア王国はとても貧しく、贅沢な生活は出来ない状態ではあったものの…

王様のモットーで国民は大切にされ、心豊かに暮らしていた。

『ああ…

今日は良い天気だな。

たまには散歩も良いもんだな。レイナ』

『トレゾア王国の王子ともあるつお方が、城下をウロウロされてて
大丈夫なんですか？

しかも、このあたりの土地からはソフィア王国じゃないですか！

私がついておきながら、命でも狙われたり…

王様に顔向け出来ませんよ。』

レイナは当たりを気にしつつ、落ち着かない様子だった。

『お前気にしすぎなんだよ。』

「…」

変なヤツだと思われて、逆に怒しまれるだろ？が。

まつ、お父様のことは気にしなくていいぞ。
もし命を狙われたら、無言の帰宅になるだろ？し…

アハッ！アハッ！

レイナの不安をよれり、香氣に笑うトモであった。

『まつたく…

こんなで國を継ぐ事は出来るのかしらねえ。』

レイナはあまりの情けなさに小言を言い始め、トモがついて来ない
ことに気付かず一人歩いて行つた。

『…いいですか。

王子であるからには、この貧しい國の為にも、どこかの姫と結婚し
て、後継者を育てなければならぬのですぞ…』って聞いてます！

？』

レイナが振り向くと…

遠くでアホズラをかいている、トモの姿があつた…

『あのアホ王子…

また面白いものでも見つけたかな?
まったく世話がやけるなあ～』

不機嫌なレイナの顔を見ることなくトモは口を開いた…

『 なあ…

レイナ…

僕…

天使を見つけたよ…』

トモの視線の先には…

言葉では言い表せないくらいの…

美しい女の子がいた。

第2話

緑の葉が風に揺れ

暖かい光に包まれながら、少女はお花畠で眠っていた。

その寝顔は美しく、どこか無邪気さを感じる、まさに天使の微笑であつた。

『へへひつーー』

なんとも可愛らしさイクシャミと共に目覚めた少女は、辺りを見回し何かを思い出したのか、慌てて何処かへ行ってしまった…。

その様子を怪しきうかがつづつの視線：

『ああーああー

行つちゃつたあー

しつかし可愛かつたですねえ

城下にもあんなに可愛らしい女の子が居るとはなあ

レイナが振り返ってみると…

そこには、だらしない顔をしたトモが立っていた。

『おお～い！

王子～～～！！

聞いてますかあ～～～？』

レイナの呼びかけは届かず、一人の世界に浸っていたトモの口がよ
うやく動き出す…

『レイナ…

僕、あの子が欲しくなっちゃった。

何処の家の娘かな…？

探しでおいてくれ。』

『もお～

面倒くさいなあ～

これじさ～

まるでシ○リ○リ○リ○すわ

『とにかく、あの子に特別な何かを感じたんだよ。
こんな気持ちちは初めてだ…』

『王子～～～ってヤツですか～～～？

松田〇王子～～～あるまいし』

レイナは馬鹿にしたように笑った。

『お前…

今、笑つただろ?』

今月の給料から減給決定なー。(笑)』

『ちょ、勘弁してくださいよお~。

必ず、わたくしの子を見つけだしますからあ~。』

『女に一言は無いな?

期待してるよ。』

しかし、情報不足といつのもありどんなに探しても…

その女の子は見つかることはなかつた。

第3話

ここはソフィア王国の城。

小鳥はさえずり、花は咲き乱れ、美しい彫刻や絵画が飾れており…

『ザ・セレブ…』を絵に描いたような場所。

そんな静かな空間に…

今、まさに…！

雷が落ちよつとしていたのだった…

『ル～キ

お前…今まで…

何処で何をしてたんだよ…？

たく…

勉強サボリやがって…

お前の親父に叱られるのは俺なんだぞ…！

罰として俺様の肩を揉め

『ヒイー

ごめんなさい
許してハルカ

『ハルカ…様だろ？』

『はいー…そうでした…』

生活指導を担当する家庭教師のハルカは厳しく、ルキは頭が上がり逆らえずについた。

腐つてもミカン…（笑）

これでもルキはソフィーリア王国の姫。

ルキがハルカにイジられるのは珍しくもなく、いつもの光景で他のメイドも放置状態であった。

『ああ～ら

ルキつたら

またハルカを怒らせて…

今度は何をやらかしたのかしら？（クスッ）』

突然、聞いた事のある声が！？

振り向くと、ソコには…！

ルキの幼なじみのノゾミが立っていた。

『ノゾミイ』

聞いてよお』

ハル……じゃなくて…

ハルカ様がねえ

私をイジメるの〜（泣）』

『何を言つてるんだ！

ルキがレッスンをサボルからいけないんだろー？』

『いつ見ても…

オカシナ夫婦漫才としか思えないけど。

どっちが雇主なのか分からぬわね（笑）』

『ハルカは良いの。

家庭教師つていう事で傍に居るけど、そんなの肩書きにすぎないわ。

ハルカは私の良き理解者であり、大切な親友よ！』

『あのお…スゲ』

感動的なシーンになつてるけど…

ルキ：

お前は俺様の下僕にすぎねえ〜から（笑）』

それはハルカの照れ隠しであった。

『もお〜

ハルカたらあ〜
私、Loveな
く・せ・に』

『テメエ〜

一度、死んでみる? (笑)』

『ハルカ…[冗談に聞こえないから]

顔を青くしているゾゾミをコソニ、ルキは『いや〜ん』っと可愛く
かわす…

長年ハルカと暮らしてきたのもあって、慣れているのか、麻痺して
いるのか分からぬが…

さすがのコンビネーションである。

第4話

ルキとノゾミは久しぶりに会った。

ノゾミは相変わらずのテンションで、周りを笑わせてくれる。

幼なじみという間柄だが、姉妹のように仲が良かつた。

『姫様…』

ドアの方から聞き慣れない声が！？

一同が振り向くとルキ達と同じくらいの年齢の男の子が立っていた…

『やつぱりルキ様の所にいらっしゃいましたか』

男の子はノゾミに話かけた。

どうやらノゾミの知り合いのようだ。

『やつぽー雅

よく場所が分かったわね。

ルキ達に紹介するのは初めてかな？

私のダーリンの雅くんでえ～す（ハート）』

『え……』

何故かルキは雅の姿を見た瞬間から固まっていた。
そしてノゾミの言葉に反応してしまったのだ。

『ん？

ルキ、どうしたの？』

『あつ……いや……
なんでもない……』

『ルキ……

今、覚えてる」と分かるよ。

私も初めて会った時はビックリしたもん。

けじれあ……

わつ……ひみつ……

前に進まなきや……』

『うそ……だけど……』

ルキとノゾミの暗い記憶……

かなり昔のことだが、忘れたことはなかつた……

『あの…』

暗い空氣の中。

初めに口を開いたのは雅だつた。

『俺…姫様の恋人な…』

『シッ！それは言わない約束でしょうー？』

慌ててノゾミが割り込んできた。

『えっ？なんの話？』

面白そうな話にルキが食い付いてきた。

『いや…』

なんでもないよ

『あ～や～し～い～

ノゾミ、あんた私に隠し事してるでしょ？』

『だから

なんでもないんだってば！…』

『姫様…』

もうここまできたらお話するしか…』

二人には何か深い事情がありそつだつた

『でも…』

第5話

そつと雅は語り始めた…

『実は、姫様のお父様が…』

「そろそろお前も年頃なんだから、結婚を真面目に考えなさい」一つ
とお見合いの話を持ちかけられました。

でも好きでもない人と結婚なんてできませんよね?

姫様に恋人でもいれば逃げられたんですが…

姫様には恋人どころか、好きな人さえいらっしゃらず

「私は雅を愛しています」と勢いで宣言しちゃったんです

『そつかあ…』

でも何で最初っから私に相談してくれなかつたの?

私達親友でしょ?

水くさいじゃない…』

『ゴメンね…』

けど何処で秘密が漏れるか分からぬじやない?
だから念には念を入れたいのよ

『なるほどねえ…』

つか雅くんつて良い子だね。

ノゾミのお世話をさせておくのが勿体無いくらいの好青年だわ。
うちの厳しいお世話係と変わってほしいくらいよ(ボソッ)』

『ルキ…

何か聞こえたが、俺の聞き間違いだよな?』

今まで無口の聞き役だったハルカが、突然突っ込んできた…!

『あつ…ハルカ様…

お元気でしたか? (焦)』

『なにオカシナことを言つてるんだよ!…
ちゃんと聞いてるんだからな!…』

一人の夫婦漫才(?)を見つつ、雅は羨ましそうに言つてきた。

『おー一人共、すごく仲が良いんですね。
息もピッタリだ!…

俺なんか身分の違い過ぎで、姫様になんて見向きもされない…』

『雅くん…

もしかして…』

雅はルキの言葉が終わる前に、ノゾミに気付かれないよう…

人差し指を唇にあてて

「シー」というポーズをし、小さく笑った。

それと同時に雅の気持ちを理解するルキであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1329d/>

ある恋の物語

2010年10月17日07時47分発行